

Confederate Flagに関する一考察

——“heritage”か“hate”を超えた思考に向けて

庄司 宏子

序

Ta-Nehisi Coatesは南北戦争から150周年の2012年に発行された*The Atlantic*の特集号に寄せた“Why Do So Few Blacks Study the Civil War?”の記事において、戦争終結後に敗北した南部からつくり出されたLost Cause（失われた大義）という捏造された戦争記憶がいかに奴隷制度の廃止をもたらしたこの戦争から黒人を排除してきたかを詳述している。雑誌編集者であったEdward Alfred Pollardによる1866年の著*The Lost Cause: A New Southern History of the War of Confederates*に始まり、約一世紀にわたって形成された旧南部を美化する歴史イデオロギーであるLost Causeが描き出す南北戦争史観とは次のようなものである。南北戦争の原因は奴隷制度をめぐるものではなく、経済構造や文化が異なる南部と北部とのあいだで妥協が失敗したためである。南部が連邦を離脱し、南部連合国を結成したことは合法であり、州の権利である。奴隷所有者は奴隷に温情的であった。こうしたLost Causeは南軍の指揮官を英雄視し、南北戦争を壮大な悲劇として物語り、南部に同調的なジャーナリストや歴史家、旧南部軍人によって信奉され、ときの大統領の言動や小説や映画を通じて拡散した。Lost Causeがもたらす奴隷制度の忘却ないし軽少化と人種格差の肯定は、戦後の南部社会のさまざまな領域に入り込み、ジムクロー体制を形成し、白人至上主義の温床となった。Lost Causeは、戦後に南部と融和を図り、奴隷制プランテーションに投資してきた歴史を忘却したい北部にも「心地よい歴史」として受容され、その結果、南北戦争は白人同士の戦争となり、黒人は小道具のような付けたりの存在となったとコーツは指摘する。現代にも残るLost Causeの浸透力は、戦争とは軍事的な戦いの終結をもって終わるものでは決してなく、戦争のあとに起こる戦争の記憶をめぐる長い戦いがあること、そうした言説の戦いにおいて南部は圧倒的な勝利を収めていることをわれわれに語りかけている。

コーツの論考は、南北戦争後のLost Causeを例にとり、アメリカにおける歴史言説の形成に宿る白人至上主義を詳述している。そして、奴隷制度の上に築かれた旧南部社会のトーテムであり、Lost Causeの象徴であるConfederate flag (いわゆる南軍旗) は、今日にいたるまでこの大義の存続に一役買っているとす。本稿では、白人至上主義や人種抑圧と同一視されるConfederate flagが南部諸州の州議会議事堂や裁判所などに設置されるようになる19世紀末から、公的場所から旗を撤去する議論や運動が起こる現代までの歴史的背景を追ってみたい。そしてこの旗がもつ人種差別的アピールや、それを扇動する集合表象としての意味合い、この旗がどのような意図のもとに利用されてきたのかを捉えてみたい。さらに、アフリカ系アメリカ人、とりわけ南部で生まれたアフリカ系アメリカ人の意識のなかにConfederate flagがいかに深く沈潜しているか、その作品にこの旗がどのように扱われているか、そのシンボルとしての意味の盗用、あるいは解体するべく行われた試みを捉えてみたい。そうした試みに見られる旗のシンボル性に対する真摯な思索やLost Causeという人種主義に対する抗議や抵抗のかたちから、Confederate flagの何を問うべきかという問題が明らかになるであろう。

1. トランプ時代のNew Lost CauseとConfederate flag

コーツは「なぜ南北戦争を学ぶ黒人が少ないのか」を含め『アトランティック』誌上に寄せた自身の寄稿を纏めて2017年に*We Were Eight Years in Power*として出版するが、この南北戦争に関する論考に寄せた短い序文のなかで、この記事を書くきっかけとなった時代背景に言及している。彼がアメリカの存亡の重大な危機と呼ぶ南北戦争から150周年目の年はオバマ政権の時代に当たる。コーツは、post-racialismのオバマ時代のあとにトランプ大統領の登場を促す背景には「白人の憤怒 (“white resentment”）」があるとして、そうした感情はかつての保守的な「古い国」のかたちを懐かしみ、国の分断を嘆くものではなく、分断そのものからパワーを得るもので、ポストオバマの時代にLost Causeを醸成した南北戦争後の時代が重なるとしている (62)。

コーツに限らず、南北戦争後に起こるLost Causeとトランプ時代との類似を指摘する声はかなりある。それは2016年の大統領選におけるトランプの勝利と、2021年1月6日に起こった連邦議会議事堂への襲撃事件をめぐってな

されている。CNNのJohn Blakeは、2016年の大統領選のあと、オバマ大統領後にトランプ大統領の当選をもたらす背景について、保守系メディアを中心に起こった人種の役割を否定するか、もしくは矮小化する論評を挙げている。アメリカはその歴史の過程で、その変革に人種が果たした役割を実に認めたくないとして、こうした傾向を南北戦争後の危険なLost Causeに似た「人種的忘却 (“racial amnesia”）」だと述べている (Blake)。ブレイクは、トランプの勝利を実現させる白人の「人種の憤怒 (“racial resentment”）」という体裁のわるい醜い力を覆い隠す傾向は、南北戦争後のLost Causeによる奴隷制度の否定や人種的自己欺瞞の繰り返しであり、こうした人種の等閑視自体が人種差別であると述べる。¹

『アトランティック』誌のDavid A. Grahamは、2021年1月6日の連邦議会でバイデン候補の勝利を確定させる日に起こったトランプ支持者による議事堂襲撃事件を“New Lost Cause”と呼び、過去のLost Causeとの類似点を次のように指摘している。新旧のLost Causeは「殉教者カルト」であり、恥ずべき敗北を雄々しき勝利に転換し、国を攻撃した犯罪人を愛国者に仕立てようとする。何よりLost Causeの危険性は、それが「失われた」ものとはならず、国の一体性、自由や正義に持続的な害をもたらすことにある (Graham)。CNNも襲撃事件を“New Lost Cause”と呼び「きわめて有害な白人の反動 (“deadly white backlash”）」であると論評している。議事堂への侵入者のなかにConfederate flagを持つ者の姿があること、彼らが「真のアメリカ、本物の (つまり白人の) アメリカを取り戻す愛国的防衛者」と名乗っていることに言及し、Lost Causeの本質とは白人至上主義にほかならないことを深刻に捉えている (Barnes and Merritt)。トランプ自身もその在職中にConfederate flagを称揚し、Robert E. Leeや南軍兵の像への表敬を繰り返し、南軍将校の名前にちなむアメリカ陸軍基地名称の改名を求める声が高まるなか、基地名称は“part of a great American heritage”であると退けていた (Santucci)。

Lost Causeのイデオロギーは南北戦争後、敗北を糊塗しようとする南部側から直ちにつくり出されるが、そのシンボルとしてConfederate flagが公的な場所で翻るようになるのは、19世紀末のことであり、この大義を拡散させようとするUnited Confederate VeteransやUnited Daughters of the Confederacyなどの団体の活動によるものである。Confederate flagはLost Causeのプロパガンダ的な大義を象徴するシンボルとして登場する。しかしその一方で、Lost

Causeに付属するConfederate flagはものであるがゆえに特定の団体や個人がその主義主張を表すためさまざまに専有・盗用される。2015年のチャールストンで起こった白人至上主義者による黒人教会の襲撃と信者の殺害事件や2020年にミネアポリスで起こった白人警官によるGeorge Floyd氏殺害事件の後、アメリカの各地にある南部連合のシンボルの撤去や南軍将校の名にちなむアメリカ軍の基地の名称を改称する運動が盛んになっている。² Confederate flagはLost Causeのイデオログによってどのように利用されてきたのか、またこの旗をめぐる抵抗はどのように文学やアートによって表現されてきたのか、以下にその奇跡を辿ってみたい。

2. 再建時代後のConfederate monumentsの広がり と Confederate flag

現在一般にConfederate flagと称されている赤地に青のSt. Andrew's cross (聖アンデレ十字) は、南北戦争時のthe Army of Northern Virginiaの戦旗をもとにしたもので、南部連合国の正式な「国旗」であったことはない (Coski 195)。³ 南部連合国が脱退した南部の州のゆるやかな繋がりであったことから、地方や郷里ごと、あるいは部隊ごとに夥しい数の南軍の戦旗があったという (Prince 13-18)。南北戦争後に「南軍の旗」として流布するようになるConfederate flagは、つくられた歴史“Lost Cause”と同様、南部神話の虚構性を示している。Confederate flagは当初は戦争後に南部連合の元兵士が集う記念碑の献呈など記念行事のなかで用いられていた。行事の付属物としてではなく、旗が単独に人々に意識にされるようになるのは第二次世界大戦の頃であるという (Coski 195)。1948年にトルーマン大統領による軍隊を人種統合する政策に反対して人種分離を支持する民主党内の一派がStates' Rights Democratic Party (“Dixiecrats”として知られる) を結成するが、同党が党のシンボルとしてConfederate flagを採用したことが、この旗が南北戦争の記念行事のコンテクストを離れて用いられるようになった最初の例であるという (Blakemore)。正式な南部連合国旗ではなかった旗がConfederate flagとして流布する端緒は、人種分離を奉じるグループによる旗の“appropriation” (「援用」あるいは「盗用」) であった。その後、この旗が認知される範囲は拡大する。E. John Longによると、現在the Army of Northern Virginiaの戦旗を元にした旗が、一般にConfederate flagとして認識されるようになるのは、1948年

から1952年頃に起こる「旗への熱狂 (“flag fad”）」によるものである (qtd. in Coski 203)。以下にConfederate flagが南軍兵の像や他のモニュメントとともに、Lost Causeの高まりのなかで公的な場所で可視化されるようになる経緯をその時代背景とともにみてゆく。

南北戦争が終結して100年以上経過するなかで、南部の裁判所や州議会議事堂、公園などに南軍兵や記念塔などのモニュメントが個人の寄付や州の予算、またUnited Confederate Veterans (1889年設立) やUnited Daughters of the Confederacy (1895年設立)、Sons of Confederate Veterans (1896年設立) などの団体の出資によって建立されるようになる。Winberryによると、裁判所の敷地に建てられたモニュメントの約93パーセントは1895年以降のもので、その半数以上は1903年から1912年にかけて造られたという (22)。ウィンベリーは、こうしたモニュメントが19世紀末から世紀転換期の時期に南部の町の風景に登場する要因を、南軍兵の生存者が晩年にさしかかるという年代、再建時代の終わりから四半世紀の時間の経過、Lost Causeが旧南部社会への懐古的カルトあるいはニューサウスへの反動として台頭すること、さらにRadical Populismへの対抗という四つの要素を挙げている (26-28)。ThorntonはConfederate symbolsは南部連合の産物ではなく、再建時代終了後に起こる南部連合のリバイバルの産物だという。ジョージア州では南部連合への同調の感情を表すことは民主党の知事が登場する1871年までは不可能なことであり、Confederate flagを掲げることは共和党急進派の重しがなくなり白人支配の民主党が再び州をコントロールするようになることの徴であったという (237)。旧南部連合のシンボルは、再建時代が永遠に終結したことの証として現れるのである。

19世紀末にはConfederate flagは州旗のデザインに取り入れられるようになるが、それは1890年代半ばに小規模農民や小作人など、人種を超えた経済的目標を掲げて階級闘争を行うPopulistsの台頭に対して危機感をもった南部民主党が、南部連合やLost Causeを白人共有の歴史記憶とすることで、白人同士の和合を謀ろうとするものであった。北部のカーペットバガーを追い出して自治を取り戻し、「救済された (“redeemed”）」南部で復活する南部連合のシンボルであるConfederate flagは、北部に対する反抗と奴隷制時代から続く黒人への抑圧という白人至上主義の南部民主党の強い政治的メッセージを表すものであった (Thornton 239)。⁴ポスト再建時代の1870年代から1880

年代に起こる南部連合のリバイバル、Lost Causeという南部に都合のよい歴史記憶の創出、それにConfederate flagの称揚のうえに黒人の選挙権の剥奪と人種分離のジムクロー体制が敷かれていくのである。

Confederate flagが表す白人優位と他人種に対する抑圧の含意は、第二次世界大戦後によりその意味合いを強めることになる。1950年代から1960年代には公民権運動や人種統合への反対者がConfederate flagを掲げた。Confederate flagは再建時代後から現代に至るまで、白人至上主義を含意するシンボルとして時代を超えて再利用されている。

3. つくり直される Confederate flag

——旗の借用・援用・延用・誤用・盗用

人種主義や白人至上主義のシンボルとなっているConfederate flagだが、旗の意味合いがLost Causeを離れて用いられる事例もある。1990年代の多文化主義の時代以降に登場するneo-Confederatesは人種主義や人種分離の擁護を含意するLost Causeとの連想を避けるため、Confederate flagは南部の「遺産」であり、人種差別の「ヘイト」ではない、として“heritage, not hate”のモットーを掲げるようになる（Hale 16）。またConfederate flagがもつ国家の権力に対する反逆のイメージからか、遺産ともヘイトとも関係なく、この旗はオートバイ愛好者やアメリカの田舎に住む十代の若者のアウトサイダーぶりや反権威的な身振りとして人気であるという（Coclanis 44）。また南部ともアメリカとも関係なく、鉄のカーテンが崩れソビエト連邦が崩壊した直後、東欧諸国の人々が共産党に対するシュプレヒコールのなかでConfederate flagを掲げた事例もあったという（Coclanis 44-45）。

Confederate flagのシンボル性を利用しつつ、旗がもつ人種主義や白人至上主義の含意を根底から変え、旗がもつ波及力を削ごうとする試みもある。そうした盗用の早い例が、1964年に結成されたSouthern Student Organizing Committee (SSOC) によるグループのシンボルで、Confederate flagを背景に黒い手と白い手が握手するイラストである。黒人と白人の双方の同盟をイメージしたものであったが、Confederate flagがもつ人種抑圧の連想は強く、批判はあったがSSOCが解体される1969年までエンブレムとして用いられた。1970年代末に、白人のカウンターカルチャーのなかからConfederate flagのシ

ンボルを盗用する試みがあったが、人種的統合を意図するものではなかったという (Walker)。

1997年にはチャールストンで二人の黒人企業家によるアパレルメーカーNuSouthがConfederate flagの色を黒、赤、緑のAfrican liberation movementの色に変えたロゴでTシャツやジャケットなどの販売を行っている。設立者はConfederate flagの色を変えたアパレルを開発した意図について、「かつての奴隷の息子や娘たちに。かつての奴隷所有者の息子や娘たちに。衣服がわれわれを結びつける。言葉がわれわれを自由にする」とそのキャンペーン広告で述べている (Lundegaard)。NuSouthの設立者たちはサウスカロライナ州の州議会議事堂に翻る伝統的な“Dixie banner”(Confederate flagのこと)の代わりに、改色した自分たちのロゴを掲げようという行進を行っているが、その運動は戦闘的というよりただの皮肉に見えるという (Walker)。

4. 「旗を奪還しろ」——Percival Everettの小説「文化の盗用」

Percival Everettは、1996年の短編“The Appropriation of Cultures”で、まさにタイトルが示すとおり、「文化の盗用」という手段でConfederate flagに対する抵抗を描く。エヴェレットの試みは、白人がLost Causeの歴史解釈や南部連合国のシンボルによって南部の公的空間も精神空間を専有している状況、南部に生まれた黒人がその土地を自分の故郷と呼べない状況を、“Dixie”(南軍兵士の行進歌)やConfederate flagを「盗用」すること——創造的につくり変えることによって、転覆しようとするものである。

パーシヴァル・エヴェレットは1956年に生まれ、物語の舞台であるサウスカロライナ州コロンビアで育った。小説「文化の盗用」では時代についての言及はなされないが、描かれる車のメーカーや機種から、おそらく1960年代後半から1970年代半ばのコロンビアが舞台と思われ、エヴェレット自身のConfederate flagなど南部連合のエンブレムが表す白人至上主義と黒人に対する抑圧への怒りや嫌悪感が、主人公の黒人青年Daniel Barkleyの行動や思考に深く反映されていると思われる。ダニエルはブラウン大学を卒業したあと(エヴェレット自身もブラウン大学卒である)、故郷のサウスカロライナに戻るが、母や伯母の遺産があるため働く必要もなく、それゆえ白人との経済的な依存関係に縛られることなく、本を読み、趣味のジャズを愛好者の仲間と

サウスカロライナ大学の近くで演奏する生活を送っている。あるときダニエルは、酔っ払った白人学生のグループから「Dixieを演奏してくれ」と言われ、戸惑う。彼は子供の時から「ディクシー」を嫌っていた。「白人たちが自らに、そして白人以外の人間に、自分たちの存在を誇示するための曲」(24) だったからである。バンドのメンバーの不快な顔つきや他の白人学生の気まずい様子をよそに、ダニエルは演奏を始める。ゆっくりと歌詞をかみしめるように。「この歌詞は自分のもの。この曲は自分のもの」と思いながら、声の表情が嘲りにならないように歌う。歌い終わると、会場は静まりかえり、人々の目はダニエルに注がれていた。そして拍手喝采が起こる。ダニエルはディクシーを注文した学生たちが嘲笑を浴びながらそそくさと立ち去るのを目にする。その演奏からの帰り道、ダニエルは、その夜の出来事を考える。彼がディクシーを大真面目に心から歌ったことは、皮肉にも彼が南部の土地を自分の真の故郷としたかったこと、この綿花の地獄のような場所が自分の故郷であり自分の血もここにあるのだという気持ちを改めて認識させた。「23歳にして彼の怒りは昔のまま衰えることはなく、その夜の白人の学生たちの様子を車中で思い出しながら青いライトがバックミラーに光るのを見ていると、彼は怒りを一時忘れられることを知り、心が安らぐのを感じていた」(25)。彼は家に戻ると、ゲティスバーグの戦いのPickett's charge (ピケットの突撃) について読む。その夜彼は出撃するピケット將軍の兵士を路上で止め、「俺の旗を返してくれ」(25) という夢をみる。

ディクシーの一件の後、ダニエルはConfederate flagのステッカーが後部窓に付いた中古トラックを白人のTravisから購入する。Confederate flagを取らなくてよいのかと訝るトラヴィスに対し、ダニエルはその旗は“black power flag” (28) だと答える。ガールフレンドのSarahもダニエルがConfederate flagが付いたトラックを購入することにしたと聞くと、彼は頭がおかしくなったと思う。そんなサラにダニエルは“rebel flag” は自分の旗だと言い、「あのおつたれ旗は州議会議事堂に翻ってやがる。旗を引き下ろすな。ただ奪還すればいいんだ。それだけだ」(28) と言う。Confederate flagを付けたトラックで街を乗り回すダニエルと、それを憤る白人や不審の念を抱く黒人の若者との間で悶着が起こりかけるが、彼は「ただ誇らしく〔旗を〕なびかせているだけだ」(29) と言う。やがて、ディクシーを自分の歌として歌い、Confederate flagを自分の旗として掲げるダニエルを黒人たちは見做うようになる。コロン

ビアの街のいたる所で、黒人が運転する車にConfederate flagが付けられ、黒人のビジネスマンや牧師が襟ピンやネクタイ留めにこの旗を付けるようになる。伝統的な黒人大学や独立記念日の黒人の祝いでも旗が掲げられる。やがて白人の運転する車からConfederate flagは消え、州議会議事堂からも旗はひっそりと消えていた。⁵

以上がエヴェレット描く白人が作り上げた南部連合のシンボルの黒人による文化盗用を描く物語である。時代が1960年代後半から1970年代半ばと思われることから、1956年生まれのエヴェレットが自らも体験したであろうアメリカ南部の学校の人種統合の時代とその社会状況、黒人と白人の関係、南部の黒人がおかれた状況を物語は色濃く映し出している。小説は、サウスカロライナ大学のキャンパス近くの学生のたまり場、ダニエルが住む大学近くの専門職の人々の快適な住宅地（人種統合された空間）、州都コロンビア郊外の白人住宅地（人種分離された空間）、Confederate flagなど南部連合国のシンボルが占拠する社会的空間（州議会議事堂やConfederate flagのステッカーを貼った車が走る公道や駐車場）など、それぞれに人種的に規定されたアメリカ南部の空間を描く。

1966年にミシシッピ州で生まれた詩人のNatasha Tretheweyは、インタビューで自身の故郷について次のように述べている。「南部のあの辺りでは、いつも車で通ると自分はよそ者のような感覚に襲われる。なぜならあらゆるものが南部の英雄の名にちなんでいるから。まるで戦争に勝ったのは南部であるかのように。これが南部。愛しているけど憎んでもいる。でもこれが私の故郷」(qtd. in Ramsey, "Terrance Hayes and Natasha Trethewey" 130)。ダニエルは酔っ払った白人学生から「ディクシーを演ってくれ」と言われたとき、そのリクエストに意図されている minstrel show のような滑稽な黒人の戯画を演じて、奴隷制時代のような人種のヒエラルキーを再現することは退ける。エヴェレットの「文化の盗用」は、ダニエルの世代の黒人が南部連合国の歴史観やそのシンボルが支配する南部空間のなかで、その人種的位相を変えてゆくファンタジーを描いている。

パーシヴァル・エヴェレットの「文化の盗用」から6年後の2002年、H. K. EdgertonはConfederate flagを持ち、南軍兵士の灰色の軍服を身に纏って、南部連合国の大義を広めようとノースカロライナ州のAshevilleからテキサス州のヒューストンまでを行進した。元NAACPのアシユヴィル支部の統括者で

あったエジャトンがなぜそのような宣伝活動をしているのか、その転向の理由は不明であるが、彼は行進の理由を「われわれ南部人が力を合わせて立ち上がらなければ、南部人であることの独特の文化を理解しない外部の者によって、自分たちの文化、遺産、宗教、風土を失ってしまうだろう」、そして黒人の若者は奴隷制度を含め歴史を誤って教えられているとして、「神とその無限の叡智によって、人々はこの地に連れてこられたのだ。神によって主人と奴隷との間にはそれまでにはない愛がもたらされた…。アフリカ人のことを心にかけているのは唯一南部の人間だけだ」(Ramsey, “Knowing Their Place” 120) と述べている。Sons of Confederate VeteransやUnited Daughters of Confederacyの集会で、「南部軍は奴隷制のために戦ったのではなく、何千人もの奴隷が南部兵として戦った」というようなLost Causeを支持する彼のパフォーマンスは人気の催しになっているという(Levin, “How the Myth of Black Confederates Was Born”)。⁶ レヴィンは、白人至上主義や人種主義を象徴する南部連合のシンボルを撤去する運動が高まる現代において、SCVやUDCなどのグループがエジャトンを歓迎するのは驚くべきことではないと言う。Confederate flagなど旧南部のシンボルへに関して、エジャトンとエヴェレットの小説で描かれた黒人たちの対し方は、奴隷制度に関する見方も政治的メッセージも真逆である。一方は旧南部の再構築を、もう一方はその脱構築を希求する点で両者の向かうベクトルは正反対であるが、ともに南部連合の記憶とそのシンボルが今なお濃密に漂う南部の地において、それぞれの解釈と欲望に沿って「自らの南部」という空間を創造しようとするその行為において彼らは一致している。

パーシヴァル・エヴェレットはConfederate flagを南部の伝統の“heritage”とも黒人に対する抑圧の“hate”でもないありかたを小説で示した。それは盗用することで旗のシンボルとしての意味を変容させることであった。H・K・エジャトンはConfederate flagは“heritage, not hate” だとした。エヴェレットと同世代であり、ミズーリ州セントルイスで育ったEddy L. Harrisは、“heritage”か“hate”に単純に二分できないConfederate flagへの思いと、この旗が体现する「南部の魂、〔中略〕人種主義の過去の暗い核心」(127)への複雑な感情をその著で表している。南部連合のシンボルが遍在する南部で生まれ育ったハリスは、“heritage”と“hate”への二分がいかに単純な図式であるか、“heritage”と“hate”は正反対のものでも互いに排除しあうもの

でもなく、南部人である彼の感情が“heritage”と“hate”のみに回収されるものでもないことを語る。エヴェレットの小説には旗のシンボル性を剥ぎ取って故郷南部を取り戻すという抵抗のテーマがあるが、ハリスもまた生まれた場所でありながら土地から阻害されているという同様な思いから、故郷を求めてバイクによる旅をする。ハリスの*South of Haunted Dreams: A Ride Through Slavery's Old Back Yard* (1993) はそうした思いに溢れた南部旅行記である。ハリスは自身の経歴を1977年にスタンフォード大学を卒業、ロンドンで勉強、パリで英字新聞に寄稿し本の出版時にはアメリカ東海岸と故郷のセントルイスを行き来していると書いているが(256)、ハリスのアメリカ南部への旅がいつ頃なされたものか年月への言及が一切なく、それがかえって南部という土地が時の経過の浸食を受けず、ウィリアム・フォークナーがいう「過去は消えてはいない。過去にすらなっていない」という永遠の時間のなかに宙づりされた空間であるような印象を深めている。

ハリスにとって南部とは、「多くの歳月が流れたが、南部はまだ私の悪夢を占めていて、記憶に取り憑いている。幽霊が引く鎖のようにその幻影が音を立てて私を押しえつけ、私を恐怖に陥れる」(13) という場所である。メイソン・ディクソンラインを南に越えると、時間を遡って過去へと深く入り込んでいくような気持ちになり、ハリスの目にConfederate flagが飛び込んでくる。「道路にはConfederate battle flagsが翻る。その旗は家の正面玄関に、ピックアップトラックの後ろ窓にぶら下がる。車のバンパーに付けられ、帽子やジャケット、店の窓に飾られている。本のカバーにも旗の色がある。この旗は、この空間が何処なのか何なのかを常に思い出させる」(37-38)。

南部に足を踏み入れた瞬間から、ハリスは何か嫌悪の対象となるものを探そうとするが、その感情は自分の祖先にも向けられる。ハリスの祖父から3代遡る祖先(名はJosephという)はヴァージニアの奴隷であったという。「私は彼を嫌った。奴隷制度の恥辱に耐えるより自死を選ぶ勇気がなかったことに対して。〔中略〕彼は自分が捕獲された奴隷であることが奴隷制度の子孫たち——奴隷や奴隷所有者の両方の子孫たちにどのような影響を及ぼすか想像できなかったのだろうか？ 死んだ方がましだったろうに」(123) とさえ思う。聖なる地とされた古戦場、社会の至るところに奴隷制度を維持するために戦った戦争の記念碑があり、戦争に負けたことを「恥や後悔とする碑はどこにもなく、戦争がまだ終わっていないことを思い出させるものがあるだ

け」(123)の南部。南部の州の半分の州議会議事堂にはConfederate flagが翻り、それは「南部が、40年前も、60年前も、100年前も、200年前もそうだったように、いかに今も黒人市民のことなど全く気にかけていないかを大声で宣言している」(124)。旗は「南部の白人のみのために——ヘイトのシンボル、人種分離のシンボル、誇りのシンボル」として存在し、「シンボルとは共有できるものではない。シンボルが私のものであれば、あなたのシンボルであることはあり得ない」(125)。ハリスは、祖先のジョゼフが奴隷主のJohn(彼はジョゼフの父であったかもしれないと家族のなかで伝えられている)から1832年に解放されたこと示す書類をヴァージニア州のGoochlandの郡庁舎で見つける。旅の終わり、ハリスは*Southern by the Grace of God*という人種分離を支持する本の著者Michael GrissomにNashvilleで会う。その本の表紙にはConfederate flagが印刷され、本屋の店主はそうした白人至上主義者の本を店に置くのを躊躇うものの、この本は「すごく売れる」(249)と言う。グリッソムは自分の本の白人のファンとの面会だと思い込み、現れたハリスに戸惑い怯える。ハリスに向かって奴隷制度を復活させれば黒人の失業問題は解決されるだろうと嘯くグリッソムは旧南部を体現し、彼が最も嫌うタイプの人間だが、ハリスは次のように思う。「私は、かつての南部を恋慕するこの男を気の毒に思った。今の南部ではなくそうであったらよいのにと願う南部に。自分の想像のなかにある過去に深く生きている彼の現在がどんなに惨めであるかを考え気の毒に思ったのだ。〔中略〕結局のところ嫌悪(“hate”)の感情は浮かんでこず、自分でも戸惑うような悲しみがあるだけだった。彼を叩きのめしたとしても、子供を殴っているようなものだったろう」(251)。

ハリスが旅路の果てに発見した南部は、自分が子供の頃にみた悪夢の南部とは、グリッソムがしがみついている奴隷制の南部と同様に、「想像のなかの過去(“an imagined past”）」なのだというものであった。

5. 南部からアメリカへ

ハリスが描く「想像された南部」は、南北戦争後に起こるLost Causeの上に築かれる旧南部の記憶に繋がる。ゲティスバーグの戦いの一部であるピケットの突撃は、南部兵の勇猛さを表す神話としてLost Causeの中核をなしている。フォークナーの*Intruder in the Dust* (1948)でもその神話的瞬間を謳

われたその戦いは、現実には南軍にとって無謀で惨敗に帰した戦いであった。元々ピケットの突撃の神話構築は、北部の連邦支持者が芸術作品で取り上げたことから始まったものであったが、すぐさまLost Causeの信奉者によって南部兵の「勇気の瞬間」を示すものとして取り入れられたという (Graham)。

Confederate flagは南部アラバマ州、アーカンソー州、フロリダ州、ジョージア州、ミシシッピ州、テネシー州の州旗のデザインに取り入れられている (現在一部の州では州旗のデザインが変えられている)。サウスカロライナ州では州旗ではないものの、1962年から州議会議事堂に翻っていた。1950年代から1960年代にConfederate flagの意匠を州旗に取り入れたことには、同時代の公民権運動や人種隔離政策撤廃に対する猛烈な抗議の意味合いがあった (Thompson and Tian 598)。2002年11月のアメリカ中間選挙のサウスカロライナ州とジョージア州での知事選では、Confederate flagの撤去や州旗のデザインを改変しようとする現職知事の方針が、この旗を保持しようとする「怒れる白人有権者」の投票行動を促し、当初有利とみられていた現職候補の落選に繋がったという (Wilentz)。今日Confederate flagは再び白人至上主義者やトランプ支持者によって可視化されるようになっている。2015年6月17日に起こったCharlestonのEmmanuel African Methodist Episcopal Churchに侵入し黒人信徒9人を銃で殺害した犯人は襲撃前に人種差別的な犯行文書とConfederate flagを持つ姿をウェブサイトに投稿していた。2017年8月のCharlottesvilleの白人至上主義者の集会では、それに対する抗議者との衝突事件に至ったが、前者がConfederate flagをもつ様子が報道された。

2015年7月15日にオバマ大統領がオクラホマ州を訪れた際、滞在予定のホテルの前でConfederate flagを持つ抗議活動が行われた。その前月にチャールストンで起きた白人至上主義者による黒人教会での銃事件を受けて、オバマ大統領はConfederate flagを“systemic oppression and racial subjugation” (Rampton and Adams) のシンボルと呼び、サウスカロライナ州議会議事堂からConfederate flagを撤去するとしたNikki Haley知事の決定を支持していた。⁷

Confederate flagは、党派や人種を問わず政治家がメッセージを有権者に伝える道具ともなっている。共和党のみならず民主党の政治家も、そして白人のみならずアフリカ系アメリカ人の政治家もConfederate flagを用いて、言葉ではなくこの旗がもつシンボリックの意味合いを利用して「人種的シグナル」を送る。Stephens-Douganによると、アフリカ系アメリカ人の政治家が白人有

権者にアピールする方法として、軍隊の賛美や保守的な移民政策の提唱、それに白人の祖先を誇示することがあるが、Confederate flagの利用もそうした手法であるという。ステイーヴンズ＝ドゥーガンはConfederate flagを背景に親指を立てたポーズで写真に収まったアフリカ系アメリカ人の政治家の例を挙げ、こうした視覚的イメージを通じて、犯罪を厳しく取り締まり人種マイノリティに有利な政策を推進しないという姿勢、白人優位の人種的現状を変えるつもりはないというメッセージを有権者に伝えているという(87-89)。

Confederate flagは、奴隷制度を保守しようとした南部連合国から始まり、その後のジムクロー体制のもとで白人至上主義や人種分離主義の連想を帯び、今日に至るまで人種抑圧の起源の地として頑迷で後進的な南部のイメージを強固にしながら存在している。そこには南部を「アメリカのなかの第三世界」、また「アメリカのなかにある例外」として再び仮構し、奴隷制度という国家的な罪や、今なおアメリカから消えない人種主義を再び想像された「南部」へと結びつける政治性が働いているといえるだろう。それは奴隷制時代の南部経済と深く関わり、その上に富を築いてきたアメリカ北部の繁栄と罪の歴史を忘却することでもある。

Imani Perryは、南部は人種差別と白人至上主義が蔓延る「後進地 (a backwards corner)」(xix) とされることで、南部以外のアメリカが無罪で善良に見えるような「汚れ仕事 (“dirty work”）」をしてきたと2022年の著書で語る。旅行記の体裁で南部からアメリカを深く思索するその著の冒頭には、2021年1月6日に連邦議会議事堂の襲撃者がConfederate flagを上院議会議場に掲げたことを「ぞっとする出来事」であり、「われわれが、冷たい内乱 (“civil war”) 状態にあることを思い出させた。それは恐怖ではあるが、初めてのことでない」(xvii) と述べている。その著の末尾で、2020年5月に起こった白人警官によるジョージ・フロイド氏殺害事件に触れる。自身もアラバマ州バーミングハム生まれの南部人であるペリーは、フロイド氏が最後に発した“Mama”という叫びのなかに南部訛りを聞き取り、テキサス出身の彼が北のミネアポリスで機会を掴もうとしていたその人生を思う。「彼はコデインシロップ中毒と闘った。COVIDに罹患し生き延びた。そして殺害された。そこにはコンテクストがあるのだ」(376)。ペリーがいう「コンテクスト」とは、北部にもある人種差別の制度であり、アメリカを奴隷制度や白人至上主義の上に築かれたその歴史から遠ざけるアメリカのなかに在る人種的メカニズムの

ことである。そのメカニズムを担ってきたのが「人種の間として搾取されてきた」(xviii) 南部である。南部は「人種の地 (“the seat of race”）」(xvi) として忌まわしき人種に基づく階級差や貧困の地というイメージを一手に引き受け、そうした醜悪さはアメリカの至るところにあるにも関わらず、「南部」がその汚れの投影場となることで他の地は自らの罪を忘却し、否定してきたのだとペリーは言う。

Confederate flag に関する “heritage, not hate” という議論は、“heritage” (人種主義ではなく「遺産」だとする南部による自己弁護と自己欺瞞) と “hate” (「あなたの遺産は人種憎悪だ」[“your heritage is hate”]) と人種的暴力の地としての南部を糾弾するまなざし) との間を往還するものであった。ペリーの思考は、そうした Confederate flag をめぐる従来の “heritage, not hate” の二項対立的で相互排他的な議論を超えて、アメリカの至る所にある人種憎悪の感情を南部に投影し、それによりアメリカの自由や平等、正義の価値を喚起してその上に想像上の国家を創出しようとするアメリカ全体の共犯性を明らかにする。Confederate flag は、奴隷制度から現代の人種問題までの歴史および歴史記憶とともに、そうした国家のメカニズムとも結びついている。

結び Sonya Clark のアート

2021年1月の連邦議会議事堂襲撃事件を受けて、アーティストのSonya ClarkはConfederate flagを用いた展示パフォーマンスを行った。クラークの作品は、Confederate flagが何であるか、それをどのように思考すべきかをわれわれに考えさせる。そして、アートを通じてのみ可能になるこの旗に対する思索的、実践的、象徴的考察を行っている。「われわれが知るべき旗 (“The Flag We Should Know”）」と題された作品では、1865年4月9日にRobert E. LeeがAppomattox Court Houseでの戦いで降伏の意を示すために用いた旗(もしくは布)を “Confederate truce flag” として展示し、もし南北戦争の記憶がConfederate battle flagではなく、国家が分裂から再統合へと進む第一歩となったこの休戦の旗であったなら、その後のアメリカはどうであったかを観客に想像させる (Bowen)。Confederate flagそのものではなく、旗に用いられる赤色をモチーフにした作品では、塗料ペイントのBenjamin Moore社がPaint Color 2080-20としてその名も “Confederate Red” として販売してい

た赤色を、同社の2080-10の“Raspberry Truffle”の色と2080-30の“Cherry Wine”の色の間に配置する。そこには、Confederate flagのモチーフを付けて売り出す商品リスト（銃のグリップ、スケートボード、ビーチタオル、ヨガマット、ペットの首巻き、赤ん坊の衣服など、あらゆる販売品）が掲げられ、Confederate flagを好む顧客を当て込んでこの旗を利益に転換する商業主義を批判する。⁸ “Unraveling”という展示ではConfederate flagの旗の糸をほぐして元の三色の糸へと解体するパフォーマンスが披露される。一条一条ほぐしていくその長い工程に、人種差別を取り去っていくという意志と願いが込められている。

クラークはConfederate flagを「反乱、国家の敵、黒や茶色の肌色の人間を奴隷としてとめおく」ものの象徴と言う（Bowen）。Confederate flagは、アメリカの奴隷制度の過去を呼び覚まし、現代の人種抑圧を映し出しながら、常にそこにある。この旗はアメリカの原罪を示すと同時に社会の現在を表す指標として、誰がどのような目的でこれを利用しどこに点在するのかに関する注視と思索を促しながら、今後も存在することは間違いないと思われる。

註

- 1 コーツはトランプ大統領の実現について、白人であることが唯一の当選理由であるアメリカ史上初の大統領であるとして彼を“the first white president”とする論考を出している（Coates, “The First White President”）。
- 2 アメリカ陸軍や海軍の基地に南部の将軍の名前をつけることについて、グラント大統領の旧友主義（“cronyism”）や（Editorial Board, “Why Does the U.S. Military Celebrate White Supremacy?”）、ヴァージニア出身で南北戦争後に初の南部から選出された民主党からの大統領で、連邦機関の設備内に人種分離を復活させたウィルソン大統領が敬意を表したことが指摘されている（Staples）。
- 3 現在Confederate flagと認識されている旗は、南部連合国の正式な旗ではないことから「南軍旗」と呼ぶのは正確ではない。またこの旗の呼称も“battle flag,” “rebel flag,” “southern cross,” “Dixie flag”など種々あるが、本稿では“Confederate flag”という表記で統一する。

- 4 南部民主党のみならず、Ku Klux Klanがそのテロリズムの行為の示威に Confederate flagなど南部連合のシンボルを用いたことは白人至上主義と旗の結びつきの如実な例である。1920年代に復活したKlanはConfederate flagを二番目に重要なシンボルとした (Hale 15)。
- 5 エヴェレットは2015年6月のインタビューで、Confederate flagに対する考えを変えたと述べている (このインタビューが同年同月にチャールストンの教会で起こった白人至上主義者による黒人信徒の殺害事件の後に行われたものかどうか、この事件がエヴェレットに考えを変えるきっかけとなったのかについては不明である)。「旗は州議会議事堂の上に翻っているべきだ。たくさんの地雷が埋められている野原に来たなら、『地雷』という看板があった方がいいから」(Dischinger and Everett 261-62)と語っている。
- 6 奴隷が南北戦争で南軍兵として戦ったというのは、事実ではない。奴隷の多くが所有者に命じられ、料理人や馬糧徴発人として南軍に従事したが兵士となることはなかった。黒人南軍兵という神話は、1970年代に白人至上主義的ではない脱人種的な南部連合国というイメージを求めてつくり出されたという (Levin, *Searching for Black Confederates* 4)。同様な意図から最近では、“multicultural Confederacy”としてアフリカ系アメリカ人だけではなく、ラティーノやユダヤ人の南軍兵を扱う歴史書がいくつか出されるようになってきている (Hale 16)。
- 7 ニッキ・ヘイリー知事はConfederate flagの撤去を決定したが、旗と人種主義の結びつきは否定した。「われわれの州の多くの人にとって旗は高貴な伝統……歴史、遺産、祖先の伝統を表す。今回旗を撤去するのはひとえにRoof [チャールストンの教会を襲撃した犯人の名] のような人々が旗を誤解し、人種差別主義者の目的のために誤用するからである」(Levine)として旗そのものの人種主義や人種抑圧の意味合いは認めようとはせず、擁護した。
- 8 ベンジャミン・ムーア社は2014年に色の名前を“Patriot Red”に変えたが、オンラインショップで旧名を“Formerly known as Confederate Red. This rich, refined red is a timeless and enduring classic. A great accent wall color, it is not too bold and won't overpower a room.”と示し、宣伝に利用していたという (Shade)。

引用文献

- Barnes, Rhae Lynn, and Keri Leigh Merritt. "A Confederate Flag at the Capitol Summons America's Demons." *CNN*, 7 Jan. 2021, edition.cnn.com/2021/01/07/opinions/capitol-riot-confederacy-reconstruction-birth-of-a-nation-merritt-barnes/index.html.
- Blake, John. "This Could Be Awkward: How Trump's Victory Turns into Another 'Lost Cause.'" *CNN*, 28 Dec. 2016, edition.cnn.com/2016/12/28/us/lost-cause-trump/index.html.
- Blakemore, Erin. "How the Confederate Battle Flag Became an Enduring Symbol of Racism." *The National Geographic*, 13 Jan. 2021, www.nationalgeographic.com/history/article/how-confederate-battle-flag-became-symbol-racism.
- Bowen, Jared. "Sonya Clark on the Confederate Truce Flag and Creating a Collective Work of Healing." *PBS NewsHour*, 13 July 2021, www.pbs.org/newshour/show/sonya-clark-on-the-confederate-truce-flag-and-creating-a-collective-work-of-healing.
- Coates, Ta-Nehisi. "The First White President." *The Atlantic*, October 2017. ---. *We Were Eight Years in Power*. 2017. One World, 2018. ---. "Why Do So Few Blacks Study the Civil War?" *The Atlantic*, the Civil War Issue, February 2012.
- Coclanis, Peter A. "Dandelion Greens." *Callaloo*, vol. 24, no. 1, 2001, pp. 44-47. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/3300449.
- Coski, John M. "The Confederate Battle Flag in American History and Culture." *Southern Cultures*, vol. 2, no. 2, winter 1996, pp. 195-231. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/26235411.
- Dischinger, Matthew, and Percival Everett. "The Construction of Place: An Interview with Percival Everett." *The Virginia Quarterly Review*, vol. 91, no. 3, summer 2015. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/44715536.
- Editorial Board, "Why Does the U.S. Military Celebrate White Supremacy?" *The New York Times*, 23 May 2020, www.nytimes.com/2020/05/23/opinion/sunday/army-base-names-confederacy-racism.html.
- Everett, Percival. "The Appropriation of Cultures." *Callaloo*, vol. 19, no. 1,

- winter 1996, pp. 24-30. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/3299316.
- Graham, David A. "The New Lost Cause." *The Atlantic*, 18 October 2021, www.theatlantic.com/ideas/archive/2021/10/donald-trumps-new-lost-cause-centers-january-6/620407/.
- Hale, Grace Elizabeth. "The Lost Cause and the Meaning of History." *OAH Magazine of History*, vol. 27, no. 1, Jan. 2013, pp. 13-17. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/23489628.
- Harris, Eddy L. *South of Haunted Dreams: A Ride Through Slavery's Old Back Yard*. Simon and Schuster, 1993.
- Levin, Kevin M. "How the Myth of Black Confederates Was Born." *The Washington Post*, 17 Jul. 2019. *ProQuest*, search.proquest.com/docview/2259164060?accountid=14496.
- . *Searching for Black Confederates: The Civil War's Most Persistent Myth*. U of North Carolina P, 2019.
- Levine, Bruce. "The Confederate Flag Was Always Racist." *Politico*, 27 June 2015, www.politico.com/magazine/story/2015/06/confederate-flag-always-racist-119481/.
- Lundegaard, Karen. "Can NuSouth Logo Make More Than a Fashion Statement?" *Wall Street Journal*, 27 Jan. 1999. *ProQuest*, search.proquest.com/docview/398727588?accountid=14496.
- Perry, Imani. *South to America: A Journey Below the Mason-Dixon to Understand the Soul of a Nation*. HarperCollins, 2022.
- Prince, K. Michael. *Rally 'Round the Flag, Boys!: South Carolina and the Confederate Flag*. U of South Carolina P, 2004.
- Rampton, Roberta, and David Adams. "Obama Delivers 'Amazing Grace' at Funeral of Slain Pastor." *Reuters*, 26 June 2015, jp.reuters.com/article/us-usa-shooting-south-carolina/obama-delivers-amazing-grace-at-funeral-of-slain-pastor-idUKKBN0P60W320150626.
- Ramsey, William M. "Knowing Their Place: Three Black Writers and the Post-modern South." *The Southern Literary Journal*, vol. 37, no. 2, spring 2005, pp. 119-39. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/20078416.
- . "Terrance Hayes and Natasha Trethewey: Contemporary Black Chroni-

- clers of the Imagined South.” *The Southern Literary Journal*, vol. 44, no. 2, spring 2012, pp. 122-35. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/24389013.
- Santucci, Jeanine. “Trump Says He Won’t Consider Renaming Military Bases Named for Confederate Generals.” *USA TODAY*, 10 June 2020, <https://www.usatoday.com/story/news/politics/2020/06/10/trump-opposedrenaming-military-bases-named-confederate-leaders/5336093002/>.
- Shade, Adaptive [@AdaptiveShade]. “Example: @Benjamin_Moore, sued for its Confederate Red in 2014, renames the color Patriot Red while proudly touting its former name online.” *Twitter*, 17 March 2017, twitter.com/adaptiveshade/status/842471108674830336.
- Staples, Brent. “When America Joined the Cult of Confederacy.” *The New York Times*, 10 Aug. 2022, www.nytimes.com/2022/08/10/opinion/military-bases-renaming-commission.html.
- Stephens-Dougan, Laffleur. *Race to the Bottom: How Racial Appeals Work in American Politics*. The U of Chicago P, 2020.
- Thompson, Craig, and Kelly Tian. “Reconstructing the South: How Commercial Myths Compete for Identity Value through the Ideological Shaping of Popular Memories and Counter-memories.” *Journal of Consumer Research*, vol. 34, no. 5, 2008, pp. 595–613. *JSTOR*, doi.org/10.1086/520076.
- Thornton, Kevin. “The Confederate Flag and the Meaning of Southern History.” *Southern Cultures*, vol. 2, no. 2, winter 1996, pp. 233-45. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/26235412.
- Walker, Jesse. “When Anti-Racists Adopted the Confederate Battle Flag.” *Reason*, 24 June 2015, reason.com/2015/06/24/when-anti-racists-adopted-the-confederat/.
- Wilentz, Sean. “How the Confederate Flag Flap Helped the GOP.” *Salon*, 12 November 2002, www.salon.com/2002/11/12/confederate_flag/.
- Winberry, John J. “‘Lest We Forget’: The Confederate Monument and the Southern Townscape.” *Southeastern Geographer*, vol. 55, no. 1, special issue in memory of John J. Winberry, spring 2015, pp. 19-31. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/10.2307/26233718.